

青坂 満／あおさか みつる 1931年、江差町鶴島に生まれる。47年、初代近江八声師の門をたたき、本格的に江差追分を習い始める。68年、第6回江差追分全国大会で優勝。74年、江差追分會本部会「鶴声會」を設立。01年、最高位の江差追分會上席師匠に認定。北海道文化財保護功勞賞、地域伝統文化功勞者表彰、北海道文化賞、北海道新聞文化賞を受賞。



江差追分の情緒をかもし出す「江差追分踊り」もある。文化・文政時代、芸妓たちが座敷で踊ったもので、アイヌ民族に似せた衣装を着て披露したといわれている。1868(慶応4)年に訪れた歌舞伎俳優の初代市川弁之助が鶴の飛び交う様などを創作し、いまに伝承されている

誰とはなしに唄が始まる。津軽民謡もできれば、賑やかな沖揚げ音頭もでる。その中で、満少年をひきつけたのは一人の漁師が唄う追分だった。やがて何を聞いても、追分しか耳に入らないほどのめりこんだ。しかし「このバカタレ。追分は大人になってから唄うもんだ」と、誰も教えてはくれない。

大島小島の間(あい)とる船は
ヤンサノエ
江差通いか 懐かしや

それでも小学生になると、こんな前唄を覚えた。前唄とは、追分の本唄を引き立てるためのもので、基本譜もなく自由に唄える。第二次世界大戦が始まり「追分どころではない」状況をじつとこらえ、初代師匠の門をたたくことができたのは15歳の初夏だった。

挫折しても逃げ出さない 祖先の血が流れる

朝から晩まで追分を唄い続けた。海や山に向つて、時には井戸の反響を利用して稽古した。声が風や波の音に聞こえ始めた頃、家族がようやく文句を言わなくなった。周囲の期待を集めながらも優勝できず、挫折したこともある。それでも、追分から逃げ出さなかったのは、つらい思いをしても蝦夷地に留まらず、祖先の血なのかもしれない。

前唄
国を離れて蝦夷地ヶ島へ
ヤンサノエ
幾夜寝覚めの浪まくら

朝な夕なに聞こゆるものはネ
友呼ぶかもめと浪の音

本唄
かもめの鳴く音に
ふと目をさまし
あれが蝦夷地の山かいな
後唄
なにを夢見てなくかよ千鳥ネ
ここは江差の仮の宿

この追分は蝦夷地で二旗揚げようと、大しけを乗り越えてやってきた人々の唄である。「小さい頃から祖先が苦労した話を聞いて育ちましたからね。陸が見えたところで波にのまれて逝った人々の無念もあるはず」と、先人たちへ思いを馳せる青坂師匠。現役最高位の上席師匠就任後も、江差追分會館の道場で観光客を相手に追分の歴史や基礎を指導する。独特の記号が並ぶ江差追分の基本譜を指しながら「はい、波が寄せては返す」「さあ、一番高い波に船が上がった」「ああ、見えてきた、見えてきた」と、波のように唄うコツを教えてくれる。その海を感じさせる節回しと、飾らない人柄に、どれだけの人が虜になったことだろう。

山の調べが荒波に揉まれ やがて海の唄になった

江差追分のルーツは諸説あるが、どれも海の唄ではない。その一説に、江戸時代、信州の浅間山の麓を行き交う馬子たちに唄われた「馬子唄」がある。青坂師匠は唄を交えて、流れるようにその移り変わりを説いてくれた。

碓氷峠の権現さまは
わしが為には守り神

この唄が宿場の飯盛り女の三味線にのせられ「追分節」の名で諸国に広まった。越後に伝わった追分節は、やがて北前船に乗って江差へと運ばれた。山の調べが海の荒波に揉まれるうちに海の唄に変化したのだ。

小諸出て見りゃ 浅間の山に
今朝も三筋の煙立つ

これは小諸市に古くから伝わる小室節だが、追分節の元歌ともいわれる。古くから馬の飼育をしていた御牧ヶ原から朝廷に馬を献上する貢馬(くめ)の道唄であり、モンゴル民謡に似ているという研究